

「十字架を負う」(要旨)

聖書箇所：ルカの福音書23章26節

【1】 受難週を迎えて

受難週を迎えました。主イエスは十字架の前にして弟子たちの足を洗い、「あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」(ヨハネ 13:14b)と命じられました。新約聖書に多く登場する「奉仕」(デイヤ)は、他者の必要を満たすため、しもべの心をもって仕え、働き、そして手伝うという意味を持ちます。イエスのご自分の弟子に次のように教えられました。「あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」(マタイ 20:27-28)

▷日常生活において、主が私たちの隣に置いておられる人と互いに足を洗い合うため必要なことは何でしょうか？私たちがしもべの心を持つことができますように。

【2】 クレネ人シモン

クレネ人シモンは十字架を運ぶ働きを担った人物として知られています。巡礼のためエルサレムに出て来たシモンにとって、イエスの十字架を負って運ぶことは想定外の出来事でした。「彼らはイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというクレネ人を捕まえ、この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。」(ルカ 23:26)

マタイは「兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。」(マタイ 27:32)と記します。

シモンは自ら望んで十字架を負った訳ではありませんでした。重罪人の処刑道具を背負うことは限りなく不名誉なことでした。

「無理やり背負わせた」とは、シモンの意思とは無関係に、強制的にさせられたことを意味します。十字架を運んだクレネ人シモンについては、マタイとルカだけでなくマ

ルコも記します。「…クレネ人シモン…はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。」(マルコ 15:21)

マルコはシモンの息子たちの名前まで記録に残します。通りすがりで十字架を背負い立ち去っただけの人物ではなかったのでしょう。初代教会の間で知られるようになった人物。そして彼の子どもたちが後に教会のメンバーとなったことが想像できます。▷シモンにとって無理やり背負わされた十字架でした。彼は十字架を負うことを通しイエスと向き合うことになりました。

【3】 キリストのしもべとして生きる

弟子たちの足を洗ったイエスは次のように勧めました。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」(ヨハネ 15:12)

イエスの新しい戒めは、私たちが「自分が」愛したいように愛するのではなく「わたし(イエス)があなたがたを愛したように…互いに愛し合う」というものでした。そのように互いに愛し合うことは、自分を捨て、自分の十字架を負うことであり、犠牲が伴います(参照マルコ 8:34b)。果たしてイエスが命じられたように私たちは互いに愛し合うことができるのでしょうか。イエスは新しい戒めの直前に「わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」(ヨハネ 15:11)と言われました。私たちが互いに愛し合う秘訣は、我慢強さによるものではなく、イエスにある喜びを持つことなのです。

▷主の十字架の受難を思い巡らし、この一週間を過ごしましょう。

